

「私とジェンダー」をテーマに
毎回様々な切り口でコラムを
掲載しています。

私とジェンダー

さくら・ともみ

1964年関西に生まれる。著書に『性同一性障害はオモシロイ』（現代書館1999）、『女が少年だったころ』（作品社 2002）、『女子高生になれなかった少年』（青弓社 2003）、『明るいトランスジェンダー生活』（トランスビュー 2004）、『性同一性障害の社会学』（現代書館2006）。共著で『性を再考する』（青弓社 2003）など。NPO法人SEAN理事。

佐倉 智美

大学図書館での出会い

早いもので、私が「ジェンダー」概念を知ってから、はや20年以上が過ぎた。

そう、あの日卒業論文の研究テーマを求めて大学図書館の社会学の棚を物色していた私が発見したのは『女性とは何か』なる上下巻組の分厚い本（人文書院1983）。E・シュルロとO・チボーの共編著で日本語訳は天羽すぎ子となっており、80年代初頭におこなわれた大きなシンポジウムの記録ということらしい（現在では絶版らしく新規購入は難しいようだが、ドーセンセンターをはじめ、図書館には所蔵されている場合が少なくないはず）。

「身体編」と銘打つ上巻では、受精卵は基本的にすべて「女」であり、Y遺伝子を持つ場合のみ途中から男性型へと分化する、という話が興味深かった。そして下巻。これが「心理・社会編」ということになっており、「ジェンダー」概念の説明もここにあった。曰く、世の中の男女差というものは、本来の身体的な差異を越えて、社会的・文化的な影響で強化・強調されている——。その端緒とも言える表象として、幼稚園児の男女差に着目

した調査結果も紹介されていた。

私は自らの幼稚園時代などを思い返して「なるほど！」と思うと同時に、かくも絶対的と思ひ込んでいた男女のちがいのものが、じつは些細なものでしかなく、にもかかわらずそれを些細ではなくしているものが、かなり恣意的に醸成された社会や文化の所産であったという示唆に、大いに共感したものである。

かくして私はこの本を上下巻ともに複数回借り、同時に周辺の関連本にも食指を伸ばし、当時のフェミニズムはもとより、性別や性差をめぐるさまざまなイシューに対して、一定の知見を深めたのであった。

ジェンダーへの壁、ジェンダーの壁

当時「ジェンダー」という言葉は、まだ目新しかった。

ゆえにゼミ発表のレジメを、やはり当時はまだ珍しかったワープロで作成し、「社会的・文化的に強調された性差、これをジェンダーと呼ぶのだそうです」などとまとめると、それだけで指導教官から褒められ

たりすることも可能だった。

ただ私には大きな壁が立ちほだかっていた。「で、どうしてキミがこういうテーマをやりたいの!？」……女子学生ならともかく」

そう、当時の私は男子学生。このようなフェミニズムにかかわるような興味関心を“男のくせに”持っているのは、周囲からはきわめて奇異に見えてしまうのであった。

むろん私もソレは予測していた。だからいろいろ理屈をつけて自己のテーマの正当性を担保しようとはしていたのだが、つまるところ私自身、なぜ自分がこうした分野に惹かれるのかについては説明できなかった。いわば湧きあがる衝動のようなものだったのだ。

おそらく私は、女子学生としてこうしたテーマに取り組みたかったのだろう。つまり自らが女性として、世の性別をめぐる決まりごとの不条理を突き詰めたかったのだ。

ジェンダー規範の核心

それから時は流れ、現在は晴れて女性として（あるいはトランスジェン